

神の子を現す全託の祈り

2012年7月

神の子を現す道は「世界平和の祈り」

生長の家の教えも「人間神の子観」であり、五井先生の教えも同じ「人間神の子観」であるのです。唯一会も五井先生の教えであるのですから、当然同じ「人間神の子観」であるのです。但し、同じ「人間神の子観」であっても、生長の家の教えと五井先生の教えは異なっているのです。

【五井先生のご本：『信仰と直観』より】

只、観念的に「人間神の子」と言ったとて、「罪悪深重の凡夫」と言っていたところで、仕方がありません。その観念を實際面の生活に生かして、人類の理想を実現せしめなければ何にもなりません。私はその道について、その方法について説いてゆきたいと思っているのです。

「神の子人間」を主にしてもよし、「罪の子人間」を主にしてもよいが、共に世界平和の祈りの中に祈り入れて、世界平和の大光明の使徒としての自己の生活を、改めて頂き直してゆく心がけが必要なのです。

祈れ、祈れ、祈れ、世界平和の祈りを祈りつづけよ。私はいつでも「この一言」を皆さんに申し伝えるつもりでいるのです。(文中かっこは引用者)

五井先生の説いているように、観念的に「人間神の子」と言ったところで仕方がないのです。それでは具体的にどうしたらよいのかと申しますと、『世界平和の祈り』を祈れ」という一言になるのです。観念的に「私は神の子である」と言っても、容易に神の子の姿を現すことはできません。「世界平和の祈り」に飛び込んで、全ての想念行為を「世界平和の祈り」に投入していれば、神のみ心によって神の子の本質が現れてきて、神の子として生まれ変わるのです。

五井先生のご本を何度でも読み返す必要があります。私は何をどう詳しく説明しても、その人の心境が理解できる心境に達しなくては理解できないことがあります。「求めよ、さらば与えられん」でありまして、学ぶ気持ちがあれば教える気持ちにもなります。

唯一会は、「人間は本来、神の分霊である」という五井先生の教義を守っております。

本来の人間は真に神の子であるのです。但し、生長の家のように、まだ神の子を現していない現在の人間がことさらに「私は神の子である」と唱える行法は採用していないのです。

既に神我一体を悟った人、神人ならば、「私は神の子である」と発言しても、それは当然なことなので問題はありません。しかし、真実に悟った人、神人になった人は、ことさらに「今日は1万回唱えよう」と計画をして「私は神の子である」と唱えるようなことはしないものなのです。言い換えれば、ことさらに意識して「私は神の子である」と唱えている人はまだ真実に神の子になっていない人なのです。

真理として人間は神の子であるのです。人類は真理を知らなくてはなりません。しかし、真理の言葉を唱えただけでは真理は容易には現れないのです。その真理を実現するには、「世界平和の祈り」という祈りの道が最も安全で近道で短距離の易行道であると五井先生は教えて下さっているのです。

神への全託の祈り

誰でも自己の幸福を願わない人はいませんし、一日も早く自己の神性を顕現したいという宗教上の目標も持たない人はいません。それを無理に抑えたり、自己暗示や念力の方へ持って行かないで、神への全託の祈りに全て転換してしまうとよいのです。

たとえばこのように祈ればよろしいのです。

守護霊様、私たちの本心が現れますように
守護霊様、神の分霊の私が現れますように
守護霊様、あの人の本心（神性）が現れますように
守護霊様、あの人本来の神の子の姿に還（かえ）りますように
守護霊様、世界人類の神性が一日も早く顕現されますように
守護霊様、全ての人一日も早く神人となりますように
守護霊様、（今から）私が神の子でありますように
守護霊様、（今から）私たちが神の分霊そのものでありますように
守護霊様、（今から）私たちが神人としての行為ができますように
守護霊様、（今から）世界人類が神の分霊でありますように

このような祈り方ならば間違いではありません。正しい祈り方と言えます。「世界平和の祈り」だけでは物足りなく感じ、満足できない人は、自己の願いをこのような祈り言に転換して、守護霊様のみ心の中に委ねてしまえばよいのです。このような祈り方をしておきますと、面白いことに、次第に余計なことは願わなくなり、「世界平和の祈り」以外に必要な祈り言は消えていって、「世界平和の祈り」一つの行に専念している自己に気づくようになるのです。

永遠の輝きを放つ祈り

法然さん、親鸞さんの著述録は本当に感動させられます。法然さん、親鸞さんを見習いたいですね。私も唯一会の中から多くの妙好人が生まれると信じております。

「世界平和の祈り」の大道は五井先生によって開かれました。ところが、光を嫌う闇の暗黒想念によって、「世界平和の祈り」の大道でさえも一時覆い隠されてしまったかのように見えました。そして年月が流れ、ついに天の岩戸が開かれる時期がきたのです。「世界平和の祈り」を覆い隠そうとする暗黒想念が、大光明に照らされて浄められてきたからです。「世界平和の祈り」に秘められた深い意味を地球人類はようやく理解できるようになってきたのです。「世界平和の祈り」は今、永遠の輝きを放っているのです。

【参考：円実頓悟】

「世界平和の祈り」は完全な行法です。完全な行法であるということは偏有偏空（へんうへんくう）ではない、業の想念法則にも片寄らず、真理にも片寄らない行法であり、行じることによって生じる欠陥が一つもなく、他の行を何もつけたす必要がない、ということです。

完全円満な教えを円教（えんきょう）とも言い、親鸞さんは、阿弥陀仏の与えられた本願一乗の教えを「専中（せんちゅう）の専、頓中（とんちゅう）の頓、円中（えんちゅう）の円」と説いています。「南無阿弥陀仏」という念仏の教えは、専ら行なう教えの中でも、さらに最も行なう教えであり、一足飛びに悟りを開く教えの中でも、さらに最も短時間で悟りを開く教えであり、完全円満な教えの中でも、さらに最も完全円満な教えである、と説いているのです。

欠けるところがない完全円満な真実の教えは直ちに悟りに導く教えであることを円実頓悟と言いますが、「世界平和の祈り」はまさに現代における円中の円であり、円実頓悟の教えであるのです。

質疑応答 1：真の感謝行は神への全託行から始まる

【ご質問-1】

感謝行のことなのですが、これを続けていくことは世界平和のお祈りをしているのと同じ効果があるのでしょうか。常に常に「神様ありがとうございます」と思い続けようと思いますが、簡単そうに見えて難しいなと思っています。

【お答え-1】

「世界平和の祈り」を基本にしていけば、ご自分の好きなようにお祈りしても構いません。五井先生は『神さま、ありがとうございます』だけでもいいんですよ」と度々おっしゃっていました。ご承知のように、五井先生は『神さま、ありがとうございます』だけで私は悟った」ともおっしゃっていました。

「神さま、ありがとうございます」という祈り言は短く唱えやすく、単純でありながら奥が深く、明るいひびきのする実により祈り言です。私もこの祈り言が大好きでよく唱えますが、最初から唱えることができたわけではなく、ある一つの段階を経て唱えることができるようになったのです。

「世界平和の祈り」を続けておられますと、いつしか「真の感謝」の心境に至るのです。「世界平和の祈り」よりも、「真の感謝行」を続けてゆくことは遙かに難しいことです。それは全感謝は全託行の究極の姿であり行為であるからです。「世界平和の祈り」は、前半の「全託行」と後半の「感謝行」の二つの行に分けられるのですが、私は前半の「全託行」を中心に教えております。なぜならば、「全託行」をしていけば自然と「感謝行」も深まってゆくことを私は自身で体験したからです。何事にも順序があるように、悟りにも順序というものがあるのです。

私の体験を申し上げますと、五井先生の真似をして「神さま、ありがとうございます」という祈り言を形式的に繰り返し唱えていたのですが、いつまでたっても五井先生のように神我一体になれず、感謝の心境も深まった気持ちがしませんでした。そのうち段々と疲れてまいりまして、途中でやめてしまいました。それから暫くして、白光真宏会に入会してから 20 年後のことですが、ふと思いついて、私は「神さま、お願いします」という全託行を始めたのです。すると不思議なことに、それまで言えなかった「神さま、ありがとうございます」の祈り言が心の底から沸々と湧いてくるようになったのです。そこで、五井先生の法話（特に講話）を読み返してみますと、五井先生も「神さま、お願いします」と頻繁におっしゃっているではありませんか。私はその事実を発見して驚くとともに、「なんだ、そうだったのか」と自分の心境の変化の理由が分かったのです。「神さま、ありがとうございます」の前に、「神さま、お願いします」という全託が必要であったのです。五井先生も「神さま、ありがとうございます」の前には「神さま、お願いします」と唱えていたのです。そして、次第に心境が高まってゆき、ついに「神さま、ありがとうございます」だけの意識になってしまったのです。

そこで私は、皆さんには「神さま、お願いします。世界人類が平和でありますように」という全託行に重点を置いて祈る方法をお勧めしているのです。大自然への感謝も「世界平和の祈り」に含まれていますから、唯一会では「世界平和の祈り」以外に特別な感謝行は行ないません。なお、昌美先生の「地球世界感謝行」は、感謝の光明一色ではなく、謝罪や懺悔の言葉が混ざっているため暗い感じがしますから、繰り返し読むには適さないと

私は思います。

【ご質問-2】

空々しい感謝行と真の感謝行についても教えていただけないでしょうか。

【お答え-2】

『白光への道』の中に「真の感謝行について」という法話があります。そこに「そらぞらしい感謝の言葉はやめよう」と書かれておりますから参照なさってください。

1. 偽善的感謝行：不平不満を抱きながら、「ありがとうございます」と嘘をつく行為。
2. 虚栄的感謝行：「私は無限なる感謝の心境にいる」と自分を偉く見せかけようとする行為。
3. 形式的感謝行：心の伴わない合掌や商売の感謝の言葉のような形式だけの行為。
4. 不完全感謝行：「私は大自然全てに感謝する」と説きながら、「敵をやっつけよう」と怒る行為。
5. 強要的感謝行：「7万回感謝しなければいけない」と強要する行為。
6. 功利的感謝行：現世利益があれば感謝するが、何も利益がないと不平をこぼす行為。

以上が五井先生の説く「空々しい感謝行」であり、真の感謝とは心から湧いてくるもので、現世利益が何もなくとも、自分に都合が悪くとも、自然に「ありがとうございます」と言える行為です。真の感謝とは、たとえ自分が痛い時でも、人から悪口を言われても、不幸な状況にあっても、如何なる状況にあっても感謝できなくてはならないのですから、大変難しいのです。「私は全てに感謝している」と言いながら、感謝していない人を見つけると、その人を侮ったり蔑む人がいますが、それでは全てに感謝しているとは言えません。感謝しない相手に対しても、敵のような相手に対しても、「ありがとうございます」と心から言うのが真の感謝行であるのです。ですから、真の感謝行とは実に難しい行為で、どうしても偽善的形式的になりがちなのです。そこで私は「世界平和の祈り」への全託行一つにしぼって説いているのです。

【ご質問-3】

私には単純な事しか分からないので、教義と「世界平和の祈り」以上の難しいことは分からないのですが、それでもいいのでしょうか。神様への感謝、それだけでいいような気がするのですが。

【お答え-3】

おっしゃる通りです。守護の神霊への感謝を含む「世界平和の祈り」だけ行じていさえすればそれでいいのです。理論としては、最低限、「真理の宣言行」の欠陥と「想念の法

則」の欠陥を知っておいて下さい。折角欠陥の無い完全な行である中庸の「世界平和の祈り」を知りながら、天に片寄った真理の言葉に把われたり、地に片寄った業想念の法則に把われてはなりません。天と地をつなぎ、天の理想を地の現実に現すには、中庸に位する「世界平和の祈り」しかないこと、これだけは覚えていて下さい。

質疑応答 2 : 他の宗教書を読む際に気をつけること

【ご質問-4】

実は、私は「世界平和の祈り」を続けているうちに他の宗教にも関心が出てきております。今、読みたいと思っているのは生長の家と出口王仁三郎さんの本です。最初はその読みたい気持ちは「消えていく姿」だと一生懸命否定していましたが、どうしても読みたいのです。そこで、私達が他の宗教の本を読む際に気をつけなければならないこと、注意点を教えていただきたいのです。

【お答え-4】

他の幾つかの宗教を数十年と遍歴してきて、ようやく五井先生のみ教えにたどり着いた人は、他の宗教を既に知っているのですから、今さら他の宗教に関心を持つことは少ないと思います。それに対して、初めての宗教信仰が五井先生のみ教えであった場合、「五井先生のみ教えが自分に一番適している」と直観的に思いつつも、宗教を深く理解できるようになるにつれて他の宗教にも関心を持つようになるのは誰にもあることで、それは「より確固とした信仰を得たい」と思うからで、後ろめたく思う必要はありません。

私も五井先生のご本を全て読み終えた後、生長の家と大本教の本も殆ど読みました。五井先生の教えは、大本教、生長の家の流れを汲む総合宗教であり、どのように変化してきたのかを知っておくことは、五井先生のみ教えを深く理解するのに役立つものです。特に生長の家の旧光明思想と五井先生の新光明思想を比較することはぜひとも為さねばならない必要なことであると思います。その上でもう一度五井先生のご本を読みますと、五井先生のみ教えがよく分かってくるはずですよ。

他の宗教の本を読む際に気をつけなければならない注意点は、

- (1) 真理の言葉に把われないこと
- (2) 因果法則に把われないこと
- (3) 現世利益に把われないこと

この三つです。五井先生のみ教えは、理想に片寄らず、現実にも片寄らない中庸の教えであるのですが、この中庸の教えが見方によっては中途半端な低い教えに見えてくる場合

があるのです。また、「世界平和の祈り」は最大の現世利益を授かる最善の方法であるのですが、五井先生は低俗な雰囲気宗教になることを嫌って、真実の生き方である愛、感謝、真（まこと）の行為を淡々とお説きになり、「これをやったら儲かるぞ」「今すぐに奇蹟が現れる」「あなたも今すぐに神人の資格を取れる」「一カ月の研修で霊能者の資格を得られる」というような現世利益的なお話、奇蹟的なお話、士（さむらい）商法的なお話は殆どお説きになりません。それだけに、現世利益や奇蹟を宣伝したり、国家試験ではないのですが、特別な資格を伝授するという宗教が非常に魅力的に見えてくるのです。この点を気をつけなくてはなりません。

「人間は本来、神の分霊であるが、現在の人間は神の分霊そのものではなく、本心と業因縁の混合した不完全な存在である。しかし、現在の業因縁は実在ではなく、あくまでも一時的な存在であり、未来には無いものなのである。現在は有るが未来には無い、その現象を一言で言えば『消えてゆく姿』という言葉で表現できる。現在から未来への時間の流れの中で不完全な業因縁は全て消えてゆき、それと入れ代わって完全な神の分霊の本心が現れてくるのである」と五井先生は説かれているのです。

ところが、「今、我は神の子であり、神そのものでもある。今、悪は無い。肉体も無い。病気も無い。不幸も失敗も苦しみも無い。憎しみも怒りも無く、嫉妬も不満も無い。我に不可能という言葉は無い。我は何事も為しうる完全な能力を持つ神の子なり。我が住む世界は完全調和した平和世界であり、争いも不調和も無い。人類は皆、神の子である。今の完全円満の世界に悪人は一人もいない」という真理の言葉を唱える宗教に初めて触れますと、非常に新鮮に感じて、「これは素晴らしい！ 五井先生の教えよりも高い教えだ」と思い込み、五井先生の「現在、業は存在しているが、未来へゆくにつれて消えてゆく」「未来に人間は神の子になる」という教えがまるで弱々しい中途半端な教えに思え、時代遅れの色褪せた教えであると誤解してしまう人がいるのです。そして、「五井先生の消えてゆく姿の教えは、昔の心境の低かった時代の人々を救うために方便的に説かれたのである。五井先生は早く究極の真理を説きたかったのだが、我々の心境が真理を理解できる段階には達していなかったので、世界平和の祈りで消えてゆく姿の教えしか説けなかったのだ。だがしかし、今は我々の心境が高まり次元が上昇したので、五井先生は、ついに究極の真理である『我は神なり』『人類は神なり』と真理を宣言する教えを我々に教え示して下さったのだ」と、自分勝手に五井先生の教えをねじ曲げて解釈する宗教者も出てきたのです。

「現在は、悪は存在するし、病気や不幸も存在している。民族紛争も戦争も存在している。現在の人間は善人もいるが、悪人もいるし凡夫もいる。しかし、現在の悪は時間の経過につれて消えてゆくのであり、人間は未来において神の子になるのである」という五井先生の教えと、「現在、悪は無い。病気も不幸も無い。戦争も不調和も無い。現在、人間は完全円満な神の子である。私もあなたも人類も現在既に完全円満な神の子である。我は神なり。人類は神なり」と真理を宣言する教えを比較した場合、五井先生の教えの方が低くて、真理を宣言する教えの方が高い教えであると思ってしまう人がいるのです。

あなたは、この二つの教えのうち、どちらが高い教えであると思いますか？

真理を宣言する教えは、非常に立派で、より高い教えであるように見えますが、真実は、五井先生の教えの方がより進んだ高い教えであるのです。これが五井先生の教えを理解する上において最も重要な鍵となるのです。それでは、なぜ五井先生の教えの方が真理の言葉を宣言する教えよりもより進んだ高い教えであるのかを易しく解説しましょう。

「我は神なり。人類は神なり」という真理宣言行は、理想を早く実現させようと焦るあまり、未来の理想を無理に現実を持ってきてしまった点に誤りがあるのです。真理をズバリと説いた点は評価できるのですが、それが行き過ぎてしまったのです。真理の言葉を宣言した初めの頃は、真理の言葉に感激して、ショック療法的に業想念を抑え、病気が治ったり、人格が高まったり、運命がよくなったりするのですが、それは一時的な効果にすぎず、真理の言葉に慣れてくるに従い、抑えていた業想念が再び噴き出してまいりまして、効果がなくなってくるのです。所詮、嘘の宣言であるのですから、時間がたちますと、嘘の化けの皮が剥がれてくるからです。

正直な人は、「我は神なり」と口先で言いながら、実際行動は神の子のように愛の行為、感謝の行為、真（まこと）の行為ができない自分を見るにつけ、非常に心苦しくなっています。自分に欠点があっても、「我は神なり」と宣言してしまった以上、人に自分の欠点を正直に話すことができません。完全な神に欠点は無いからです。風邪を引いても、「我は神なり」と宣言してしまったのですから、「私は風邪を引きました」とは人に言えません。完全な神が不完全な風邪を引くわけがないからです。仕事に疲れても、「私は疲れました」とは言えません。無限の能力を持つ神が疲れるはずがないからです。すると、風邪を引いても、風邪を引いたことを同じ信徒には黙っていて、こっそりと病院へ行ったりするようになるのです。要するに自分のありのままを正直にさらけ出すことができなくなり、表面を取り繕うことになるのです。同じく真実は全てに感謝できる心境にはなっていないのに、「私は無限の感謝に満ちている」と嘘を言って、いかにも感謝できる人間であるかのように見せかけるのです。このように現実には不可能なのに、真理の言葉を宣言したために、正直な気持ちを親しい友人にも言えなくなり、「自分は何て嘘つきなんだろう」と自分を責め苛むようになるのです。

他方、正直でない人は、自分の魂の在処も知らずに、「我は神なり」と唱えているうちに虚栄心が満たされ、何となくその気になってゆき、さも神になったかのように振る舞うのです。これは偽善と言い、そのような偽善者が神性を開発できるわけがありませんし、神になれるはずもありません。他人に対しても、真実に相手を神の子と拝めるわけでもないのに、「あなたは神なり」と言ったり、「〇〇さんは神なり」といかにも立派そうに口に出したりするのです。相手を批判する思いを持ちながら、表面上は「〇〇さんは神なり」と形式的に言ったり書いたりするのです。また、真理の言葉を使っているうちに、段々と高慢になったり、相手への思いやりが欠けてくるのです。たとえば「お母さん、私は今、体が痛くて寝込んでいるんです」と嫁が言っても、その嫁に対して、「神の子の人間に病気は無いのだ。無限なる能力を持つ人間に疲れることなど無いのだ。『起きることができ

る』と思えば起きることができるのだ。今すぐ立て！」と、嫁の苦しみに少しも同情せず
に嫁を責める姑が現れたりするのです。理想に片寄った真理の言葉は、真理を顕現させる
どころか、このように偽善者や冷酷な人間を生み出してしまう危険があるのです。これが
真理宣言行の非常な欠陥なのです。

「あなたの人生はあなたの思った通りになる」「『成功できる』と思えば成功できるの
だ」という想念の法則（因果の法則）を利用した人生成功法は、善因善果の面だけを見れ
ばよいのですが、どうしても悪因悪果の面を見てしまいがちなのです。その理由は、現実
は悪いことの方が多からずです。すると、「今の自分の運命が悪いということは、私は過
去世でよっぽど悪いことをしたに違いない」と自分を責めたり、人を見ても、「ああ、あ
の人があんなみずばらしい姿で生活しているのは過去世で悪いことをしたからに違いな
い」と蔑んだ目で見えるようになり、自他一体を観じる愛の行為から外れてしまうのです。

真理の言葉も想念の法則論も、このように使い方によっては恐ろしい責め道具になっ
てしまい、地獄のような苦しみを自分や他人に味わわせる結果となりかねないのです。「自
分も友人も真理の言葉を宣言したり想念の法則論を使っていますが、自分はそんなふう
に苦しんだことはないし、自分の友人たちもそのように苦しんだという話を聞いたことが
ありません」と言う人がいるかも知れません。しかし、それは真剣にその行法をやってい
ないから分からないのです。いい加減にやらずに、真剣にやればやるほどその行法の欠陥が
はっきりと分かってくるはずなのです。

五井先生は、真理の宣言行も想念の法則論も過去に散々やったのです。散々やった上で、
これらの行法の欠陥を悟り、この二つの行法をきっぱりと捨て、悟りへの新たな道を探
求したのである。そして、ついに守護の神霊への全託という祈りの道を発見したのである。

「神さま、ありがとうございます」という神への全託の祈りには、理論も理屈もあ
りません。赤ん坊が母親に体を委ねるように、神の大愛と絶対力を信じて神のみ心にお
任せするだけです。この他力行が易しいようで難しいのは、目に見えず、耳にも聞
こえない神秘の存在である神を信じるのが案外難しいからです。他力行は神を
信じれば救われるのですから、素直に神を信じられる直観的な人は幸いです。し
かし、何事も理屈で納得しないと実行できない知性的な人は、神への全託の祈
りという行法よりも、「他に頼らずに自己の内なる神性を生かせ」という自力論
や想念の法則論の方が惹かれやすいのです。こうした知性派の人は、頭でい
くら考えていても神の実体は掴めないのですから、神への全託行である祈
りの行に一度全身全霊で打ち込んでみて体験的に理解するようにしたらよい
のです。

神への全託の祈りとして、五井先生は私たちに「世界平和の祈り」を教
えて下さっていますが、この祈りの行は、真理の宣言行のような欠陥もなく、
想念の法則論のような欠陥もありません。他力の祈りの行は正直に生き
られるので偽善者になる心配はなく、無理がないので、自分を責めたり
人を責めたりする欠陥もなく、因果の法則に束縛されて恐怖に

怯えることもないのです。つまり、「世界平和の祈り」こそ天の理想と地の現実を結ぶ中庸の道であり、神性を顕現する最善最良の道であり、何も加える必要のない完全な道であるのですから、不完全な欠陥のある「真理の宣言行」や「想念の法則による運命改善行」などを加えてはいけません。欠陥のある余計な行を加えてしまうのは、それも経験となるでしょうが、「世界平和の祈り」の完全性を知らないからで、その分だけ却って神性開発が遅れてしまうのです。

五井先生の以上の基本的な教えをしっかりと理解しておけば、他の宗教の本をどんなに読んでも低い宗教団体に転落してゆくことはないでしょう。それから、これは五井先生に学んだことですが、書店で本のタイトルだけを見ただけで嫌悪感を感じる宗教書があった場合、自分の直観に従い、その宗教書を読むのは止めることです。「読んでみたい」と心から好感を感じる本を選んで読むようにすることです。これは著者の写真の人相からも大体見当がつくはずですが。

五井先生にある講師が「こんな宗教書があるんですけど、いかがですか？」と本を見せると、五井先生はその本を手にした瞬間、ポーンと遠くへ放り投げてしまいました。そして、目の前の講師にこうお話しになったのです。「こんな本に扱われてはいけません。この宗教家は本物ではないし、書いてあることも真実ではない。折角君が持ってきてくれた本を君の前で放り投げてすまなかったが、神さまがお嫌いになって放り投げたんだよ」と。

宗教は神を信じる道ではありますが、何も疑いのない無批判の人間を作ることではありません。神への信仰が深まれば深まるほど真偽の区別がついてきて、批判力がついてくるものです。批判力がつきながら、同時に調和力もついてきますから、攻撃的にならず、穏やかでいられるのです。「疑うな。ただ信じるだけでよいのだ」と批判力を失わしめる教えは真の宗教ではありません。真の宗教であるならば、疑っても疑っても信仰が崩れることはありません。疑われて崩れる宗教は早く崩れた方がよいのです。

私は、他の宗教書を読めば読むほど、いつも五井先生のみ教えの素晴らしさを改めて感じさせられます。五井先生の「世界平和の祈り」以上の宗教の行はありません。もし「世界平和の祈り」以上の優れた祈り言や行法があったら私に教えてもらいたいものです。「世界平和の祈り」以上に私の魂を魅了する祈り言はありません。永遠の祈り言である「世界平和の祈り」に全託できる私たちは何という幸せでしょうか。他の宗教書をたまに読むたびに、私は「世界平和の祈り」につながったことに幸せを感じ、私を導いて下さった守護霊様と五井先生に心から感謝を捧げるのです。